

徳を頂く道

(昭和二十九年八月六日)

「徳の無い間は心配する、神徳を受ければ心配はない」

金光様はこのようにみ教え下されております。世の中で一番恐ろしい事は何か、それは「徳切れ」であると断言しておられます。

信心させて頂く以上は、何とかして一番有難いものを得させて頂き、安心の生活をさせて頂きたいと思えます。そうなるには、どうしてもしっかりお徳を頂かんことにはなりません。

そこでどうしたらお徳が頂けるかという事が問題です。お徳を頂くには、仕返しをせぬ心、討ち向う者に負けて時節にまかすことが大切です。なか／＼これが出来ません。向うが一の力で来たら、こちらは二の力でいく。向うが五で来たら、よし、こっちは十でやってやれ。こういうような気持を皆、持っております。また、意地を張って、相手を殺してしまってもよいというような恐ろしい根性があります。それではお徳が頂けません。

布教の初めごろ、一人のご婦人が参って来られました。そのお方は、阿倍野警察署の近所に転宅して来られて、この辺りに教会は無かろうかと探されましたところが、吉野通りの紅梅寿司の

横丁の小路の奥に、金光様の提灯がみつかりました。

「先生、実はまえに住んでおりましたところ、私は主人との仲に子供がございませんので、主人の縁つづきの女の子を養女として育てておりました。その三人暮らしの家庭の中に、乳のみ児を抱えた人が、刑務所へ入った夫の留守に身の置き所なく、居候に來られることになり、そのお世話をさせて頂いておりました。

ある日、その人が、『ここへ参って信心しなさい』とお道にみちびいて下さいました。時々お参りをして、み教えを頂いている内に、有難くてたまらず、毎晩お参りをしていると、ある日、教会で何やら胸さわぎがするので、急いで家に帰ってみて、大変な場面を見せて頂きました。

今まででしたら、それこそ大騒動です。主人に食ってかかり、相手の女をつかんで大げんかが起ったことでしょう。しかし、おかげで教会へ走って参ることが出来ました。冷静な気持で行動することが出来ましたのは、信心のおかげです。養女を連れてその家を出ることになり、家を探して見つけたのが中道市場の前でした。こんな事情でここにお引寄せを頂きました」

という身の上話です。仕返しをする心を、神様にあずけて、一心に信心しておられましたら、再婚のご縁を頂かれました。それは、萩の茶屋のおふる屋さんで、後妻にと望まれたのです。早速、教会にお伺いに見えました。

その時、私は、

「あなたはお嫁さんにいくというような心でなしに、この自分の頂いている有難いご信心を、そこに持って行って、向うの家の人を皆、おみちびきさせて頂くというような有難いご修行をしに行く。『自分はお嫁にいくのではない。女中として雇われていくのだ』と自分に言いきかせて、辛抱させて頂きなさい」

と申しました。それは、何故かと言うと、先方は、なか／＼複雑な事情の家庭です。先妻のお子達がおられる。中にはむつかしい親戚もおられる。おふる屋さんですから、いろ／＼な人手がいります。そんな人々の中で、後から連れ子をして入っていくのですから、普通の心では到底やっ
ていきません。

「先生、しっかり信心させて頂きます。み教えを肝に銘じておかげを頂きます」
と素直に聞かれました。

「先方にいかれたら、私はどこにも行きたくはありませんが、金光様にだけはお参りさせて下さいと頼みなさいや」と申しました。

すると結婚後、間もなく「どうぞ、先生、宅祭を仕えて下さい」とお願いに来られました。何

と有難いことだと、その家に参りますと、一間半のたなに、いろ／＼な神様、仏様、その真中に、鞍馬さんが一段と大きく祀ってありまして、金光様は端の方にお祀りしてあります。

「先生、ご紹介申し上げます。こちらは鞍馬さんのお方です。うちの主人はとても熱心な信者で、鞍馬さんの大きなお堂を一建立で寄進させて頂きましたようなことで月々お祭りをなさるのです。そこへ私が金光さまの信心をさせて頂いておりますので、ようやくこの端に祀らせて頂き、主人もだん／＼お道の有難いことがわかり、このように宅祭をさせて頂くことになりました」

こういう次第で、初めての宅祭で、鞍馬さんの信心をいろ／＼きかせて頂きました。

そして、また、お道のお話を家内の人々にお伝えいたしました。こうしてお道の有難い信心が、だん／＼その家に拡まって参りました。

ある日、このご婦人が、

「先生、前の主人に赤ちゃんが出来ましたが、聞くところによりますと、商売が立ちいかず、非常に難儀しておられます。そこで、私はこうして産衣やおむつや、また、お金も少々、先方へ持っていていかにしてもらいます。どうぞ先方をおかけを頂きますようお願いいたします」

と、お願いに來られました。これには、私も、驚きました。ひどい仕打ちをした相手が商売が立ちいかぬようになり、困っていれば、それは当然の報いだ。むしろ、よい気味だ。と大抵の人は

思います。それなのに、このご婦人は、

「気の毒なことだ。私が先の主人の許におつたら、難儀していたであろう。私の代りにその女の人が引き受けてくれた。可愛そうに」

と、お金や品物を届けてあげようという心です。私は感心しまして、

「そうですか、あなたはおかげを頂きますよ」

と申しました。

暫くする間に、先方の主人が病床に就くようになりました。きけば肺結核ということでした。

あまり、人の胸をばかり痛めて来ましたから、そんなことになってしまったのでしよう。

早速、ご神酒を持っていかれ、その人の為に一心に祈られました。

「今までは、わしが悪かった。堪忍してくれ」

と、心から涙と共にわびられました。間もなくその人は死なれたそうです。

その葬式の費用から、跡始末一切、何から何まで皆、させて頂かれ、更に、後に残った女の人の身の振り方まで世話をしあげられたということです。本当に結構なお徳を積まれました。

このようなわけで、一心に神心になって、徳をつまれましたので、そのおふろ屋さんはどんどん繁昌しました。

ある時、そのふろ屋の細い路を隔てた向い側から出火しました。一生懸命にご祈念をさせて頂きましたら、表のへいが焼けて、家に火がつき、番台の手前で火が消えました。

消防車が何台もかけつけて、

「あなたの家は、滅多に焼かんぜ。いつも世話になるからな」と、一心に消火につとめて下さったおかげで、入口のへいだけですみ、すぐに営業が出来ました。しかも火事の三日前に火災保険に入っていましたので、それも、今までに入っていなかったのが、勧められるままに入ったのが役に立ち、早速、見舞金を頂き、それで古い汚いへいが、皆新しく仕替えられ、表の改装が出来ました。

「結構なおかげを頂いた」というので、常日ごろ頂いておりました「御神米」を、タンスの上置きの中から出して、お掃除をさせて頂いておりますと、その中の一体が一部焦げて出てまいりました。早速教会に走ってお礼に来られました。今、その「御神米」は教会に保存してありますが、まことにもつたいない恐れ多いことです。

「討向う者には負けて時節に任せ」

とのみ教えの通り、仕返しをせぬ心、えらい目にあわされても、先方をうらまず、向うのよいように計らい、お徳を積まして頂く心になりますれば、神様がお守り下さいます。

それから、次第にご主人に金光様のご神徳がわかり、

「私の葬式は、金光教式でして頂きたい。死んだら、靈様に祀ってほしい」と遺言されて、三日目に樂にお国替されました。何の病氣もせず、亡くなる直前まで元気で、いとも安らかに靈になられました。

後々に少しのわずらわしい問題も残さずに、大安心の中に亡くなったのですから、このご婦人の為には、凡てが神様のお守りによって、好都合になっていきました。

どのような問題が起つて来ましても、信心によってこれを受けさせて頂き、徳を頂くよう心掛けておりますと、このようにおかけを頂いていくことが出来ます。この人がよい例です。

腹を立てず、相手をうらまず、憎まず、よい方へ心配りをしていく、この尊い信心によって、徳を頂くことが出来ます。

すべての物を生かし、恵み、お守り下される天地の親神様のご信心をさせて頂くのですから、天地のような広い心にならせて頂き、大きなお徳を頂く道を、共々にすすませて頂きましょう。